

- 1 建国の日の寄生虫博物館
- 2 如月の川の光よ頑張れない
- 3 春耕の缶コーヒーが杭の上
- 4 丁寧に暮らすちりめんじゃこ食べて
- 5 布団から羽毛出てくる涅槃の日
- 6 涅槃図の河童こちらを見ておりぬ
- 7 地動説以後のつちふる大地かな
- 8 つちふるを知る剥製の目の硝子
- 9 少し危ない近道に生ゆ昔蓆
- 10 全部順調新居から見る春の富士
- 11 たらの芽が主菜の夕餉ビール飲む
- 12 母うるさしみつばを避けて汁啜る
- 13 春泥や寿限無のようなパスワード
- 14 馬濡れて人に寄り添う春の朝
- 15 西友にぺとりと売られ草の餅
- 16 水はみずいろ朝寝の国の美しき
- 17 書斎兼書庫兼居間のヒヤシンス
- 18 春の虹水買ってから帰らねば
- 19 節約が趣味で桜の白きこと
- 20 カーテンは緑タイ料理屋の遅日かな
- 21 春星や上野これよりインカ展
- 22 春の夢影を奪われ起きられず
- 23 駅員黒し桜まみれの通過駅
- 24 マツチ箱に船と日の丸春闌ける
- 25 テンペラ画見上げて夏が近づきぬ
- 26 町長がくれる筍竹に近し
- 27 気を病まぬ人の絵画に森多し
- 28 傷口に白南風当てている休日
- 29 沢蟹が勝手口まで来ておりぬ
- 30 沢蟹が明るいう雨を連れてくる
- 31 舟燃えて終わる映画や明易し
- 32 夏草や柵の中には何も居ず
- 33 式日の母と眺める出水川
- 34 ががんぼに似た先生とががんぼと
- 35 風死んで漫画に埋もれゆく日本
- 36 目の高さにコンセントある夏館
- 37 友達に似た瓜を切り冷やしている
- 38 薙刀のつつかえている冷房車
- 39 片恋の少女裸足で踊りけり
- 40 海の日の苺を潰すための匙
- 41 帰省していいかと妹に電話
- 42 駅舎には天狗の壁画帰省する
- 43 安部公房だけの本棚驟雨来る
- 44 バルコンに濡れたライターある夕べ
- 45 見返り美人のポーズでとまる扇風機
- 46 ところてん根気はないが職はある
- 47 手すり増えしことには触れぬ帰省かな
- 48 山肌の三割は墓雲の峰
- 49 ナイターに泡立つごとき拍手かな
- 50 人混みの果てにはインド晩夏光

- 51 洗車するついでに西瓜冷やしけり  
52 床磨く我を西瓜が待っている  
53 私はねずみ花火を放つ係  
54 転居まず仏壇を積み牽牛花  
55 終戦の日の抽斗の朱肉かな  
56 タオル地の枕カバーや星月夜  
57 台風の近づいて来るジャズ喫茶  
58 秋冷の光を散らす楽器店  
59 白露や祖父の生家は祖父に似て  
60 月白やざざと広がる蕁麻疹  
61 月の宴旅に出たいと言うばかり  
62 水煙草吸えるカフェあり良夜かな  
63 塚もしくは岩を囲みて曼珠沙華  
64 蛇穴に入るやわたしを差し置いて  
65 秋雨や一番街で輪ゴム買う  
66 煙草の箱で測る大きさ鳥渡る  
67 稲穂波巨人は海を越えられず  
68 冬めいて光る国立競技場  
69 油彩まず一面青に塗りて冬  
70 背もたれに外套を掛け見る画集  
71 裸木に流星群は絡まるか  
72 風邪声に絡まる紐のごときもの  
73 あの課だけマスクの人が多すぎる  
74 冬ざれてサーバー室に残される  
75 内側の赤いカップやクリスマス
- 76 聖夜劇切り絵の森に夜が来る  
77 闇鍋の具を選びたる箸の先  
78 枯野へと古い毛布を捨てにゆく  
79 数え日のタオルの硬き実家かな  
80 賀状書くどれもメッセージは二行  
81 初夢を覚えておらず貝を煮る  
82 御降に濡れしところは若白髪  
83 市役所に獅子舞が来る市長囃む  
84 大寒の背骨は小さき骨の群れ  
85 防波堤に触れる風花帰りたい  
86 弁当の匂い籠もりて雪催  
87 どうか雪になるよとチャイを混ぜながら  
88 鞆の赤い小部屋に誰も居ず  
89 もう古いぬ人のため買う冬薔薇  
90 ゲレンデに光らぬものとして立てり  
91 牡丹雪見ている寝汗ひかせつつ  
92 雪を割る山がきれいに見える日だ  
93 床赤しはだれ野を向く譜面台  
94 はだれ野のあの一軒が生家です  
95 鬼は外人は色んな箱の中  
96 紅梅のカツと開きてエレキテル  
97 白梅や伊能忠敬よく歩く  
98 河口には重機が多し冴返る  
99 部屋は今静かな木箱春時雨  
100 春寒くいつかあなたは静かな木